

## 研 究

幼児の食行動の問題と母子関係についての  
因果モデルの検討長谷川智子<sup>1)</sup>, 今田 純雄<sup>2)</sup>

## 〔論文要旨〕

幼児の食行動の問題と母子関係について因果的に検討するため、4, 5歳児の母親191名を対象に質問紙調査を実施した。幼児の食行動の問題と幼児自身の日常行動、健康、母親の食事への配慮、育児不安、精神的ストレスとの関係についての因果モデルを構成し、その妥当性を共分散構造分析を用いて検討した。その結果、幼児の食行動の問題に直接的に影響を与えた要因は、幼児の体調不良、幼児の日常における気の散りやすさ、母親の食事への配慮であり、間接的に影響を与えた要因は、母親の育児不安、母親の精神的ストレスであった。これらの結果に基づいて、幼児の食行動の問題をもつ母親への対応が考察された。

**Key words :** 食行動の問題, 幼児の行動, 育児不安, 精神的ストレス, 母子関係

## I. 緒 言

幼児をもつ母親の多くは、子どもの食事や食行動についての悩みをもっている。例えば、八倉巻ら<sup>1)</sup>の1歳児から6歳児の母親を対象とした調査では、4, 5, 6歳児の母親から訴えのあった食行動の主なものとして、偏食、食べ方が遅い、遊び食べなどが挙げられており、子どもの食行動に何らかの問題があると認識している母親の割合は、69.9~76.6%であった。同様に、水野<sup>2)</sup>の乳幼児をもつ母親への調査では、3歳以上の幼児をもつ母親の、子どもの食事で困っていることへの回答は、頻度の高い順に、遊び食い、偏食する、むら食い、食べるのに時間がかかるであり、困っていることのない母親は18.1%であった。

このような幼児の食行動への母親の悩みについての栄養指導や保健指導での対応は、子ども

の食の問題に直接的に働きかけることが中心である。すなわち、子どもの身体発育や精神発達を考慮したうえで、生活リズムを整え、調理・盛りつけを工夫し、食卓を囲む雰囲気配慮することなど<sup>3)</sup>は一般的な助言であるといえる。

筆者らは、幼児の食行動の問題は、母親の栄養や食卓を中心とした配慮のみで解決されるものではなく、幼児自身の行動や母子関係、母親自身のストレスなどとの関係性においてとらえる必要があり、幼児自身の行動や母子関係に何らかの問題がある場合は、それらへの対応が間接的に食行動の問題を軽減させる可能性があるものと考ええる。食行動の問題と親の養育態度について検討した研究では、幼児の食行動の問題と親の養育態度の問題との関連性が指摘されているが<sup>4)~6)</sup>、子どもの食行動、子どもの日常行動と母子関係などの要因を因果的に検討することは国内外を問わず試みられていない。

A Causal Model for The Relationship between Eating Behavioral Problem of Preschoolers and Mother-Child Interactions

[1629]

Tomoko HASEGAWA, Sumio IMADA

受付 04. 4. 14

採用 04. 9. 3

1) 大正大学人間学部(研究職) 2) 広島修道大学人文学部(研究職)

別刷請求先: 長谷川智子 大正大学人間学部人間科学科 〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

Tel : 03-3918-7311 Fax : 03-5394-3037

本研究では、幼児の食行動の問題として、食物選択の幅の狭さと食事中的集中力の低さを取りあげ、それらが幼児の日常行動、幼児の健康、母親の食事への配慮、母親の育児不安、母親の精神的ストレスとどのように関連があるのか、共分散構造分析を用いて因果的に検討し、幼児の食行動の問題に関する構造を明らかにしたうえで、食行動の問題をもつ母親への対応について考察することを目的とした。

## II. 方 法

### 1. 調査対象者

東京都内の私立幼稚園に在園する4歳児149名(男児70名, 女児79名), 5歳児114名(男児64名, 女児50名), 計263名の母親であった。

### 2. 質問紙の構成

子どもの食物嗜好, 食行動, 日常場面での行動, 健康, 子どもの食事に対する母親の態度, 母親の子どもへの対応, 母親のストレスに関する項目全96問のうち, 本研究の分析に用いられた項目は, 子どもの食行動の問題に関する項目13問, 日常場面での行動に関する項目15問, 健康に関する項目6問, 子どもの食事に対する母親の態度に関する項目12問, 母親の子どもへの対応に関する項目12問, 母親のストレスに関する項目11問の計58問であった。評定は「とてもある」, 「かなりある」, 「少しある」, 「ほとんどない」, 「まったくない」の5件法とし, 質問項目に応じて適切な表現を用いた。

なお, 子どもの食行動の問題に関する項目のうち2問と日常場面に関する項目のうち10問は, Behavioral Style Questionnaire (BSQ)<sup>7)</sup>の日本語版<sup>8)</sup>, Toddler Temperament Scale (TTS)<sup>9)</sup>の日本語版<sup>10)</sup>の新しい場面に対する反応, 日常場面の变化への順応性, 気の散りやすさ, 執着性と集中時間に関する項目を引用または改変したものを用いており, その他の項目は本調査のために新たに作成した。

### 3. 手続き

質問紙は幼稚園の教員を通して母親に配布し, 対象児の母親が家庭で評定し, 無記名により1週間後に回収した。有効回収者数は4歳児

の母親111名(男児51名, 女児60名), 5歳児の母親80名(男児47名, 女児33名)の計191名であり, 有効回収率は72.6%であった。質問紙に回答した母親の平均年齢は, 35.87歳(SD 3.49), 子どもの平均年齢は5.53歳(SD 0.59)であった。

## 4. 仮説設定

幼児の食行動の問題として, 食物選択の幅の狭さと食事中的気の散りやすさを取りあげ, それらの問題の規定要因として, 子ども自身の要因と母親の要因を挙げた。すなわち, 子ども自身の要因としては日常場面での行動と健康状態である。母親の要因としては直接的には母親の子どもへの食事の配慮である。母親の要因は直接的な規定要因のみならず, 間接的な規定要因としての育児不安があり, 育児不安は日常場面での子どもの行動に影響を与える。最後に, 育児不安を抱える母親には母親自身の精神的安定が低いことが規定要因となる。

## 5. 分析方法

調査結果の分析は, 次の2段階で行った。第1は, 幼児の食行動の問題およびそれらを規定すると想定される諸要因を測定する尺度を作成した。第2は, 作成された尺度から因果モデルを構成する構成概念と項目を決定した後, 設定されたモデルをもとに共分散構造分析を行い, 幼児の食行動の問題の形成過程を探ったうえで, 幼児の食行動の問題における母子関係の要因について検討した。

## III. 結 果

### 1. 尺度構成

はじめに, 幼児の食行動の問題およびそれらを規定すると考えられる諸要因を測定する尺度を作成するために, 因子数を検討した後に, 尺度項目の選定を行った。本分析の対象となる58の質問項目の回答, 「とてもある」~「まったくない」に対して5~1を代入して, 各要因ごとに主成分分析を行った。主成分分析の結果, 得られた固有値のスクリープロットの変化と概念上の整合性から, 一次元構造とみなされたのは, 「母: 子どもの食事への配慮」, 「母: 育児不安」,

「母：精神的な安定」の要因であり、二次元の構造があるとみなされたのは「子：食行動の問題」, 「子：日常場面の問題」であった。そこで二次元の構造があるとみなされた, 子どもの食行動の問題, 日常場面の問題に関しては, 因子間の相関が高いことが想定されるので, 直交解のヴァリマックス回転の後に斜交解のプロマックス回転を行う方法で因子分析を行い, それぞれ2因子を抽出した。これらの結果を示したものが表1である。子どもの食行動の問題に関して, 第1因子において因子パターンが高い項目は, 「なじみのある食べ物しか食べない」, 「食べ物の好き嫌いがある」, 「偏食をする」などであり, 第2因子では, 「食事の間に食べることに集中しない」などの項目であったことから, それぞれ「食物選択の幅の狭さ」, 「食事の気の散りやすさ」の因子と命名した。「子どもの日常場面での問題」については, 第1因子の項目は, 初めての場所や人に慣れるのに時間がかかるという内容であり, 第2因子の項目は, 興味があることでも, すぐに他の遊びに移ったり, 途中でやめたりするという内容であったことから, それぞれを「日常場面での新奇性不安」, 「日常場面での気の散りやすさ」と命名した。また, 各項目群について, 第1主成分への負荷量および因子パターンの絶対値が0.30未満のものを不良項目と判断し, 尺度からはずした。

以上のようにして作成された8尺度のクロンバックの $\alpha$ 係数は0.63~0.91の値をとっており, 尺度V, VIはやや低い値であったが, その他の6つの尺度については尺度としての高い信頼性を有していた。

## 2. 幼児の食行動の問題についての因果モデル

因果モデルを構成する構成概念を作成するために, 各尺度ごとの主成分分析の第1主成分負荷量および因子分析の因子パターンと項目内容を考慮して, 表1の22項目, 8つの構成概念を用いることとした。あらかじめ設定した因果モデルをもとに共分散構造分析<sup>(11)(12)</sup>を行い, 構成概念間の相関係数(表2)に基づき新たなパスを加えたり, 不要なパスを除いたりして, モデルを変えて適合度を検討した。分析には統計パッケージSASの“CALIS”プロシジャーを使

用した。

はじめに, 適合度の高いモデルの採択するため, 全体的評価を中心に検討した。あらかじめ設定した因果モデルにおいて最も適合度が高いものをモデルAとして図1に示した。モデルAのGFI (Goodness of Fit Index) は0.90, AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index) は0.87といずれも比較的高い値が得られ, RMSEA (Root Mean Square of Approximation) は0.04であることから, 構成したモデルがデータの分散共分散行列をよく説明していた。また, 構成概念から観測変数に対する影響指数はすべて0.49以上を示しており, 構成概念と観測変数は適切に対応していた。パス係数は, “子：日常場面での新奇性不安” → “子：食物選択の幅の狭さ”において有意でなかった他は, すべてのパス係数が有意であった。そこで, “子：日常場面での新奇性不安”の構成概念を削除し, 19項目, 7つの構成概念によって構成されたものをモデルBとした。モデルBは, モデルAのパス図から“子：日常場面での新奇性不安”に関するパスを取り除いた他は, モデルAと同じパスをひいたものであり, GFI は0.90, AGFI は0.87, RMSEA は0.04と適合度はモデルAと同じであった。しかし, 本研究では“子：日常場面での新奇性不安” → “子：食物選択の幅の狭さ”のパス係数が有意でなかったことも含めて検討するので, モデルAを採択することとした。

次に, モデルAの因果関係の部分的評価を行うため, それぞれのパス係数を検討した。まず, 外生的潜在変数として設定した“母：精神的安定”から“母：育児不安”に $-0.35$ のパス係数( $p < 0.001$ )がみられたことから, 母親の精神的な不安定さが育児不安に影響を与えていることがわかった。そして, “母：育児不安”から“母：子どもの食事への配慮”には負のパス係数( $-0.25$ ,  $p < 0.01$ )がみられ, “母：育児不安”から“子：日常場面での新奇性不安”と“子：日常場面での気の散りやすさ”にそれぞれ正のパス係数( $0.25$ ,  $p < 0.01$ ;  $0.52$ ,  $p < 0.001$ )がみられたことから, 育児不安は子どもの食事への配慮の低さを規定しているだけでなく, 子ども自身の日常場面での新奇性不安や気の散りやすさも規定していた。子どもの食行動の問題で

表1 因子分析結果と共分散構造分析に用いた変数

項 目	F 1	F 2
子どもの食行動の問題		
I : 子 : 食物選択の幅の狭さ $\alpha = 0.91$		
X 17 なじみのある食べ物しか食べない	0.91	-0.04
X 18 食べ物の好き嫌いがある	0.83	-0.08
偏食をする	0.78	0.04
目新しい食べ物を食べない	0.78	0.10
食べ物にちょっとした味の変化があると、食べるのを嫌がる	0.55	0.01
初めての食べ物でも、すすんで食べようとする	-0.69	-0.05
X 19 初めての食べ物でも、1・2回で食べられるようになる	-0.80	0.04
II : 子 : 食事中の気の散りやすさ $\alpha = 0.81$		
X 20 食事の間、他のことに気を取られて、食べることに集中しない	0.01	0.95
X 21 食事をだらだらと続けて、なかなか終わろうとしない	-0.13	0.70
X 22 食事の最中に席を立ったり、立ち上がったりする	0.06	0.64
最後まで席に座って食べることができない	0.08	0.54
テレビに気をとられて、食べることががすまない	0.08	0.51
# 食べ物にちょっとした味の変化があると、すぐに気がつく	0.04	-0.10
子どもの日常場面の問題		
III : 子 : 日常場面での新奇性不安 $\alpha = 0.82$		
X 10 初めての場所に慣れるまでに時間がかかる	0.80	-0.12
X 11 なじみのない人と一緒にいることをいやがる	0.74	-0.07
X 12 なじみのないところに行くと、家に帰りたがる	0.71	0.03
子どもにとって初対面であると、たとえお母さんと親しく話していても、お母さんの後ろに隠れる	0.60	0.12
親が励ましてやらないと、初めてのことに手を出そうとしない	0.60	0.14
# 大人が遊ぶのをやめるように言っても、きりのよいところまでしないと、遊びをやめるのをいやがる	-0.18	-0.17
IV : 子 : 日常場面での気の散りやすさ $\alpha = 0.75$		
X 13 興味のある遊びをはじめても、すぐに他の遊びにうつる	-0.09	0.72
X 14 何か他の事に気を取られて、していることを途中でやめる	0.04	0.62
何かしているとき、関係のない音がすると、していることを中断する	0.03	0.52
遊んでいるとき、何か難しいことが起きると、すぐにあきらめる	0.19	0.51
何かしているとき、誰かの話し声が聞こえると、そちらのほうを見る	-0.08	0.50
遊んでいても、電話がなると顔を上げて見る	-0.04	0.44
本を読んだり、絵本を見たりして30分以上過ごすことがある	-0.03	-0.36
上手にできるようになるまで、一つのことを練習する	-0.14	-0.38
興味のある事は、30分あるいはそれ以上夢中になって続ける	-0.07	-0.44
V : 子 : 体調不良 $\alpha = 0.63$		
X 15 熱をだす	0.78	
X 16 風邪をひく	0.58	
おなかをこわす	0.39	
# アトピーなどのアレルギーがある	0.29	
# ぜんそくがでる	0.25	
# 頭痛がする	0.22	
VI : 母 : 子どもの食事への配慮 $\alpha = 0.68$		
X 07 子どもが栄養のバランスよく食べられるようなメニューにする	0.85	
X 08 子どもが野菜をたくさん食べられるようなメニューにする	0.71	
X 09 子どもが食べる物を選ぶときには、添加物や鮮度などの安全性に気をつける	0.57	
体によい食べ物や、体に悪い食べ物について、子どもに話をする	0.49	
子どもは、お母さんなどの大人の家族と一緒に食事をする	0.38	
お祝い事があるときには、家族でごちそうを食べる	0.34	
子どもがカロリーをとりすぎないように気をつける	0.31	
子どもが食べるものは、子どもが選ぶのではなく、お母さんが選ぶ	0.31	

# 料理をするときには、子どもに手伝いをさせる	0.29
# 子どもが喜ぶような盛りつけにする	0.20
# 間食には子どもの食べたいものを中心にする	-0.19
# 食事は子どもの好きなメニューを中心にする	-0.29
Ⅶ：母：育児不安 $\alpha=0.80$	
X04 子どもをどのように育てたらいいのかわからなくなってしまうことがある	0.74
X05 子どもがなかなか（お母さんの）思うとおりに育ってくれない	0.66
X06 子どもが言うことを聞かないと、いらいらしたり、カッとなったりして感情的になってしまう	0.66
同じような年齢の子どもをみると、自分の子と比較してあせってしまう	0.62
子どもがマイペースでゆっくりやっていると、ついせかしてしまう	0.54
子どもにささいなことがおきても心配で、気をとられてしまう	0.31
子どもが感じたり、考えたりしていることがわかる	-0.36
今の子どもの成長ぶりに満足している	-0.49
子どもと一緒に過ごすことは楽しい	-0.50
# 子どもの要求について言いなりになってしまう	0.16
# 子どもが遊んでいるのを見ると、（お母さんは）自分から遊びに参加する	-0.10
# 子どもと接する時間を取ることができる	-0.14
Ⅷ：母：精神的な安定 $\alpha=0.77$	
X01 今の生活に満足している	0.63
X02 夫とのコミュニケーションがうまくいっている	0.59
夫は育児に協力的である	0.52
今の生活環境は育児をするのに適している	0.41
子育てに悩みができたとき、気軽に相談できる人がいる	0.40
子育てをすることによって、自分の世界が広がった	0.36
自分自身の時間を持つことができる	0.31
子どものほかのきょうだいや家族の世話や介護に手がかり、子どもと十分に接することができない	-0.40
疲れやすかったり、頭痛がしたり、体の調子がよくない	-0.44
精神的にいらいらしたり、落ち込んだりすることがある	-0.45
X03 しつけや育児の方針について、夫または家族と意見が食い違うことがある	-0.57

注：# は削除項目を示す。  
X1～X22は共分散構造分析に用いた変数である。なお、X03、X19は逆転項目を用いた。

表 2 構成概念間相関

構成概念	I	II	III	IV	V	VI	VII
I：子：食物選択の幅の狭さ	1.00						
II：子：食事時の気の散りやすさ	0.18	1.00					
III：子：日常場面での新奇性不安	0.12	-0.02	1.00				
IV：子：日常場面での気の散りやすさ	0.15	0.25	0.10	1.00			
V：子：体調不良	0.19	0.26	-0.03	0.12	1.00		
VI：母：子どもの食事への配慮	-0.49	-0.13	-0.08	-0.14	-0.09	1.00	
VII：母：育児不安	0.20	0.22	0.20	0.36	0.04	-0.20	1.00
VIII：母：精神的な安定	-0.11	-0.19	0.03	-0.12	-0.11	-0.01	-0.28

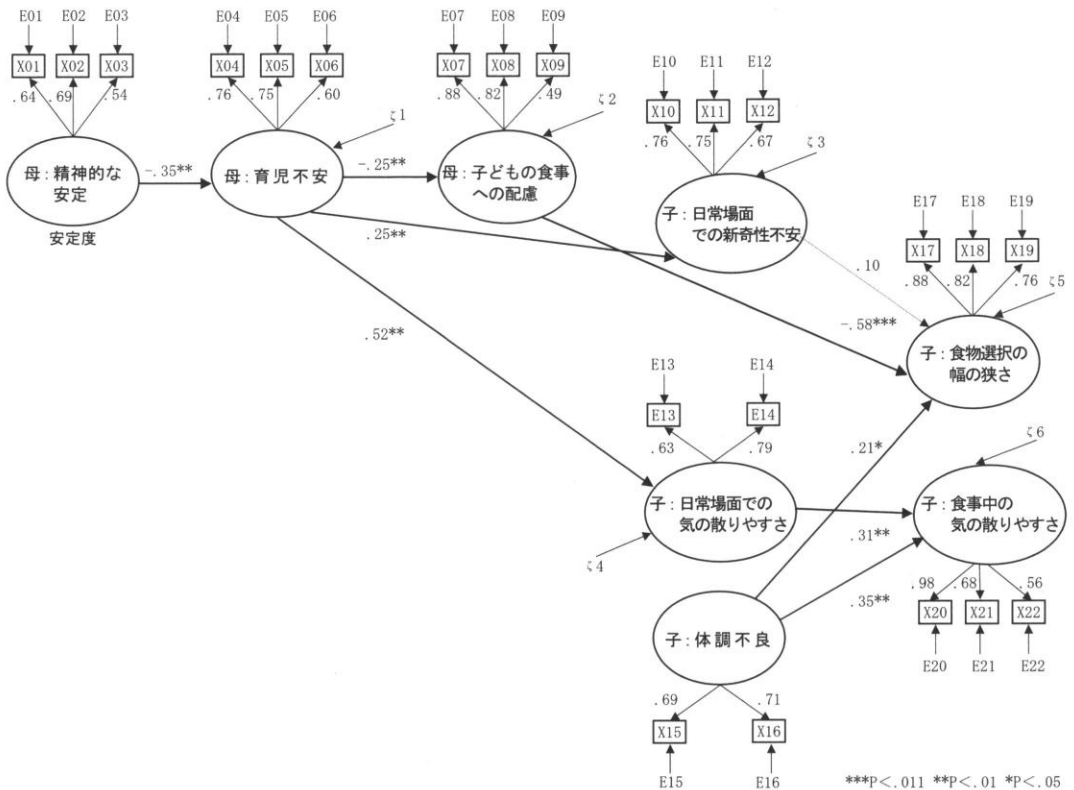


図1 幼児の食行動の問題と母子関係についての因果モデル

ある“子：食物選択の幅の狭さ”は“母：子どもの食事への配慮”から負のパス係数 ( $-0.58$ ,  $p < 0.001$ ) がみられ, “子：体調不良”から正のパス係数 ( $0.21$ ,  $p < 0.05$ ) がみられており, “子：食事時の気の散りやすさ”は“子：日常場面での気の散りやすさ”と“子：体調不良”から正のパス係数 ( $0.31$ ,  $p < 0.01$ ;  $0.35$ ,  $p < 0.01$ ) がみられた。このことから, “子：食物選択の幅の狭さ”と“子：食事時の気の散りやすさ”の規定要因として共通していたのは, 体調不良のみであり, その他に食物選択の幅の狭さには母親の子どもの食事への配慮のなさが影響し, 食事場面で気の散りやすいことは, 日常場面でも気が散りやすいことが影響していた。

なお, 前述したように, 当初“子：日常場面での新奇性不安”と“子：食物選択の幅の狭さ”への正のパスを想定したが, 両者の相関は低く ( $r = 0.12$ ,  $p < 0.10$ ), 有意なパス係数は得られ

なかった ( $0.10$ ,  $p < 0.80$ )。同様に, “母：子どもの食事への配慮” → “子：食事時の気の散りやすさ”も, 両者の相関は低く ( $r = -0.13$ ,  $p < 0.10$ ), 有意な負のパス係数は得られなかった ( $-0.11$ ,  $p < 0.80$ )。また, “母：育児不安”と“子：食物選択の幅の狭さ”, “子：食事時の気の散りやすさ”との間の相関がともに有意 ( $r = 0.20$ ,  $p < 0.01$ ;  $r = 0.22$ ,  $p < 0.01$ ) であったので, “育児不安”から“食物選択の幅の狭さ”, “食事時の気の散りやすさ”への直接的なパスを検討したが, いずれもパス係数は有意ではなく ( $0.09$ ,  $p < 0.90$ ;  $0.09$ ,  $p < 0.90$ ), 母親の育児不安の子どもの食行動の問題への影響は, 直接的ではなく間接的なものであった。

さらに, “母：育児不安”と“子：日常場面での新奇性”との間, “母：育児不安”と“子：日常場面での気の散りやすさ”との間それぞれに双方向の因果関係を想定したが, “母：育児不安” → “子：日常場面での気の散りやすさ”

のみに有意なパス係数が得られ (0.36,  $p < 0.01$ ), その他の“母: 育児不安” → “子: 日常場面での新奇性” (−0.15,  $p < 0.70$ ), “子: 日常場面での気の散りやすさ” → “母: 育児不安” (−0.11,  $p < 0.80$ ), “子: 日常場面での新奇性” → “母: 育児不安” (0.38,  $p < 0.20$ ) のパス係数は有意ではなかった。従って, 本研究では, “母: 育児不安” → “子: 日常場面での新奇性”, “母: 育児不安” → “子: 日常場面での気の散りやすさ”の因果のパスを設定した。

#### IV. 考 察

##### 1. 本研究における因果モデルの検討

本研究の結果から得られた因果モデルは, 次の通りであった。まず, 幼児の食行動の問題である食物選択の幅の狭さと食事中の気の散りやすさの両方を直接規定したのは, 子ども自身の体調不良であった。また, 食物選択の幅の狭さのみを直接規定したのは母親の子どもの食事への配慮であり, 食事中の気の散りやすさのみを直接規定したのは, 日常場面での気の散りやすさであった。母親の育児不安は, 子どもの食事への配慮の低さと子どもの日常場面での行動としての新奇性不安, 気の散りやすさを直接規定しており, 育児不安を直接規定したのは母親の精神的な不安定さであった。このことから, 本研究の仮説が支持された点は, 子どもの食の問題に直接的に影響を与える要因として子ども自身の体調不良があること, 間接的に影響を与える要因として母親の育児不安があり, 母親の育児不安の原因として精神的な安定の低さがあることである。一方, 仮説が支持されなかった点は2点であった。すなわち, 第1に子どもの日常場面での新奇性不安が子どもの食物選択の幅の狭さを規定しなかったこと, 第2に母親の子どもの食事への配慮が食事中の気の散りやすさを規定しなかったことである。

まず, 仮説が支持されなかった2点について検討する。第1の日常場面での新奇性不安が子どもの食物選択の幅の狭さを規定しなかったことの原因として, 両要因における観測変数の内容が異なっていることが考えられる。すなわち, 食物選択の幅の狭さに関する観測変数は, 食べ物の新奇性に関する項目と持続的な選択の偏り

に関する項目の2種類であるのに対して, 日常場面での新奇性不安の観測変数は, 新奇性に関する変数のみであり, 持続的な選択の偏りに関する変数はみられない。Birch<sup>13)</sup>は, 幼児の新奇な食べ物への恐怖の強さには, 子どもの気質が影響していることを論じている。本研究では, 子どもの日常行動の新奇性不安の項目として, BSQ<sup>7)</sup>の日本語版<sup>8)</sup>, TTS<sup>9)</sup>の日本語版<sup>10)</sup>から新しい場面に対する反応, 日常場面への順応性に関する項目の一部を用いたが, 日常行動における人や場所の持続的な選択の偏りに関係する行動については考慮しなかった。本研究において食物選択の幅の狭さと日常行動との関係をとらえるためには, 日常行動における新奇性不安だけでなく持続的な選択の偏りも加味して検討する必要があると考える。

第2の母親の子どもの食事への配慮が食事中の気の散りやすさを規定しなかったことについては, 現段階で推測することは難しい。しかし, 本研究において検討した食事中の気の散りやすさは, 主として食行動の問題として特異的に扱わず, 子どもの日常生活での気の散りやすさを示す一場面として解釈できる可能性を示唆している。

次に, 今後の課題について2点挙げる。第1は, 本研究での因果モデルの因果の方向性についてである。本研究の因果モデルでは, 幼児の食の問題を説明するためのものであり, 間接的原因として, 母親の育児不安をとりあげ, 母親の育児不安の原因として母親自身の精神的な不安定さを取りあげている。しかし, 幼児の食行動の問題, 日常行動の問題が原因となって, 母親の育児不安が高まるという本研究とは反対方向の因果関係も想定することは可能である。結果でも示したように, 本研究のモデル採択の過程で, これらの構成概念間の双方向の因果関係を想定したモデルも検討したが, 有意なパス係数が得られなかった。水野<sup>14)</sup>は, 乳児期における子どもの気質の扱いにくさと幼児期の母親の育児ストレスが関連していることを示しており, 今後は食行動と母子関係に関する乳幼児期の縦断的研究を行っていくことにより, 双方向の因果関係について検討していく必要がある。

第2は, 幼児の食行動の評定者についてであ

る。本研究における質問紙の評定者は母親である。長谷川・今田<sup>15)</sup>は、本研究と同一対象者において、幼児が評価した食べ物の好き嫌いの多さと母親が評価した子どもの食行動の問題、母子関係についての因果モデルを検討した。その結果、子どもの食べ物の好き嫌いの多さの直接的規定要因として母親が評価した食べ物への消極的態度が挙げられており、幼児と母親の食行動の評価には一貫性があることが認められた。しかし、先行研究では、食事に関する母親の子どもへの評価の信頼性の低さについて指摘している。例えば、Birch<sup>16)</sup>は母親の幼児の食物摂取に関する評価の信頼性の低さを問題にしている。また、八倉巻ら<sup>17)</sup>は母親が問題視している子どもの遊び食べを行動観察によって検討したところ、発達上特に問題がないことを示している。これらのことから、本研究で検討された母親の評定による因果モデルは、あくまでも母親からみた評価による結果であり、今後は実際の子どもの行動観察による検討も必要である。

## 2. 幼児の食行動の問題をもつ母親への対応について

本研究から得られた因果モデルをもとに、食行動の問題をもつ子どもの母親に対する、栄養指導、保健指導での対応について検討する。本研究では、食行動の問題をもつ子どもの母親は育児不安が高く、精神的に不安定であることが示されている。幼児の食行動の問題を母親の食事への配慮のみに焦点化してしまうと、2方向への悪循環が生じる可能性が懸念される。すなわち、悪循環の1つめは育児不安が高い母親はますます食事への配慮に焦点化してしまい、そのことにより育児不安がさらに高まることであり、2つめは母親が子どもの食事に熱心すぎるにより、幼児がプレッシャーを感じて食べることに抵抗を示すようになること<sup>18)</sup>である。

これらのことをふまえて、母親への栄養指導、保健指導における対応の際には、はじめに、子どもの日常行動の問題、母親が抱えている問題の有無を把握する必要がある。すなわち、育児不安が高く、精神的に不安定な母親に対しては、食行動だけに焦点化するのではなく、母親の状態をサポートしながら、子どもの日常的な行動のポジティブな側面を母親自身が受け入れられ

るようにしていくことである。母親自身に育児不安や精神的な不安定さが認められない場合、子どもが食べることに抵抗を示さないためには、従来から行われているような調理・食事への工夫に関する助言以外に次のような示唆も有効であると考えられる。例えば、食行動の問題には健康状態が起因する可能性があること、食物選択の幅の狭さに関しては、新奇な食べ物に対する恐怖は一時的なものであり、繰り返し提供されることにより受け入れられるようになること<sup>19)</sup>、子どもの食物嗜好は変化があり、児童期から思春期にかけてそれまで嫌いであったものが好きになるような変化が多いこと<sup>20)</sup>、食事中の気の散りやすさについては、日常場面においても同じような行動がみられるのかどうか確認し、日常場面で子どもが集中して遊ぶことができるようなかかわり、または環境的な配慮を検討することなどである。

以上のように、栄養指導、保健指導において、子どもの食行動の問題を通して母親自身の育児不安、精神的な不安定さをサポートしていく必要があるものとする。

## 引用文献

- 1) 八倉巻和子, 村田輝子, 大場幸夫, 他. 幼児の食行動と養育条件に関する研究: 第1報 幼児の食行動の分析. 小児保健研究, 1992; 51: 721-727.
- 2) 水野清子. 乳幼児栄養の現状: 乳幼児栄養調査結果報告書平成7年. 日本総合愛育研究所, 1997.
- 3) 水野清子. 幼児の食事: 食べ方の特徴・偏食の防止. 小児科診療, 1997; 60: 1419-1424.
- 4) 八倉巻和子, 村田輝子, 大場幸夫, 他. 幼児の食行動と養育条件に関する研究: 第2報 幼児の食行動に及ぼす養育条件. 小児保健研究, 1992; 51: 728-739.
- 5) 村上多恵子, 石井拓男, 中垣晴男, 他. 摂食に問題のある保育園児の背景要因: よくかまないでのみこむ子について. 小児保健研究, 1990; 49: 55-62.
- 6) 村上多恵子, 中垣晴男, 榊原悠紀田郎, 他. 摂食に問題のある保育園児の特性要因: 食べ物を口にためる子について. 小児保健研究, 1991; 50: 747-756.

- 7) McDevitt SC, Carey WB. Behavioral Style Questionnaire (for 3-7 year old children). Unpublished manuscript, 1975.
- 8) 佐藤俊昭, 古田文俊男. 子どもの行動の調査: 3~7歳児用 (BSQ). 東北大学, 1982.
- 9) Fullard W, McDevitt SC, Carey WB. Toddler Temperament Scale. Unpublished manuscript, 1978.
- 10) 庄司順一. 行動様式質問紙 (1~3歳: JTTS). 未公開.
- 11) 豊田秀樹. SASによる共分散構造分析. 東京: 東京大学出版会, 1992.
- 12) 豊田秀樹. 共分散構造分析入門編—構造方程式モデリング—. 東京: 朝倉書店, 1998.
- 13) Birch LL. Children's experience with food and eating modifies food acceptance patterns. Friedman MI, Tordoff MG, Morley RK, Eds. Chemical Senses vol.4: Appetite and Nutrition. New York: Marcel Dekker Inc., 1991: 303-324.
- 14) 水野里恵. 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連: 第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究. 発達心理学研究, 1998; 9: 56-65.
- 15) 長谷川智子, 今田純雄. 幼児の食物嗜好と母子関係に関する因果的研究(2). 第62回日本心理学会大会論文集, 1998: 321.
- 16) Birch LL, Fisher JO, Grimm-Thomas K. The development of children's eating habits. Meiselman HL, MacFie HJH, Eds. Food choice acceptance and consumption. London: Blakie Academic & Professional, 1996: 161-206.
- 17) 八倉巻和子, 村田輝子, 森岡加代, 他. 幼児の食行動に関する研究: 「遊び食べ」行動分析の事例 第1報. 小児保健研究, 1997; 56: 749-756.
- 18) Bigner JJ. Parent-child relations: An introduction to parenting fifth edition. New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1998.
- 19) 長谷川智子, 今田純雄, 坂井信之. 食物嗜好の発達心理学的研究: 第2報 食物嗜好理由. 小児保健研究, 2001; 60: 479-487.
- 20) 長谷川智子, 今田純雄. 食物嗜好の発達心理学的研究: 第1報 幼児と大学生における食物嗜好の比較と嗜好の変化の時期. 小児保健研究, 2001; 60: 472-478.